

研究員 の眼

音楽が繋ぐ日本とインドネシア —「心の友」から「JKT48」へ—

保険研究部兼経済研究部 主席研究員アジア部長/新潟大学大学院教授 平賀 富一
(03)3512-1822 hiraga@nli-research.co.jp

インドネシアは日本企業の投資先としての伝統国であるが、特に、近年は、アセアン（東南アジア諸国連合）において最大の人口を有し中間層が拡大する有望市場としての魅力も増しており、サービス企業や中堅中小企業の進出も加速している。

その国で、非常に多くの人々に親しまれ口ずさまれている日本の曲がある。

それは、五輪真弓さんの「心の友」（1982年発表のアルバム「潮騒」の中の収録曲）であり、同国の第二の国歌などというややオーバーな表現で報じられることもある。

筆者は、20年以上前からインドネシアを20回以上訪問しているが、「心の友」（Kokoronotomo）の現地での浸透ぶりを知ったのはタイミングとしては大分経った後であり、初めてその事を知った時に恥ずかしい思いをした記憶がある。インドネシアの人々からすれば、多くの人が、母国語はもちろん、日本語でも諳（そら）んじて歌える有名な歌を、何故、日本人である筆者が知らないのか不思議そうであった。日本ではアルバムの中の一曲という事情でほとんど知られていないため、現地の日本人駐在員や在留邦人の方々にも同様の経験が多いようだ。若いインドネシア人の中には元々インドネシアの曲だと思っていたと言う人もいた。

「あなたから苦しみを奪えたその時 私にも生きてゆく勇気が湧いてくる」とのフレーズで始まるその曲を聞くと、歌詞とメロディが親しみやすく心が癒される。かつて2004年12月のスマトラ島沖大地震からの復興の際に、かの曲が、多くの被災者の支えになったというエピソードも理解できる。出張で訪問したジャカルタのホテルの部屋で、その曲を聞くと、異国で昂った気持ちが穏やかになり、インドネシアをより身近に感じる心持ちにもなる。

音楽の力は偉大と言われるが、「心の友」は、身近なアセアンの国におけるその嬉しい典型例と言えるだろう。

今、インドネシアでは、「AKB48」の現地の姉妹ユニットである「JKT48」が、若者に人気と聞く。

両国の訪問者数は、2015年の年間74万人（日本→インドネシア約53万人、インドネシア→日本約21万人）が、年々増加する傾向にあり、両国の一層の交流が進んでいる。より緊密化する二国間関係の中で、今後は、「JKT48」が、音楽で両国を繋ぐ存在になるのだろうか？